

唐通事の語学書：「訳詞長短話」管見

大橋, 百合子
九州大学大学院（修士課程）

<https://doi.org/10.15017/12032>

出版情報：語文研究. 55, pp.39-52, 1983-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

唐通事の語学書

——「訳詞長短話」管見——

長崎県立図書館に寛政八年(1796)書写の、「訳詞長短話」と題する唐通事系の語学書(全五冊、うち二冊目を欠く。)が蔵されている。官命により東京通事が編纂したもので(長崎県立図書館蔵本はその編者の自筆本と思われる)、唐通事の中国語学習に際して教科書として常用されたらしいが、本文には八分に似た字体で中国語を記す傍らに、南京語のみならず、安南、東京、モウル、阿蘭、インデヤ等の異国語の発音も付されており、興味が持たれる。

最も注意を惹くのは、それらの異国語を表わしている風変わりな文字で、一見片仮名に似ているようでもあるが、和訳の仮名とは明らかに字体が異なり、そのまま読み下すのは困難な程である(写真参照)。通常の片仮名とは別に、特にこのような文字が使われたのはどういふ訳であろうか。

かつて新村出氏も、この書について若干言及されたことがある。しかしながら、その独特の文字に妨げられてか、言語の面からは殆

大橋百合子

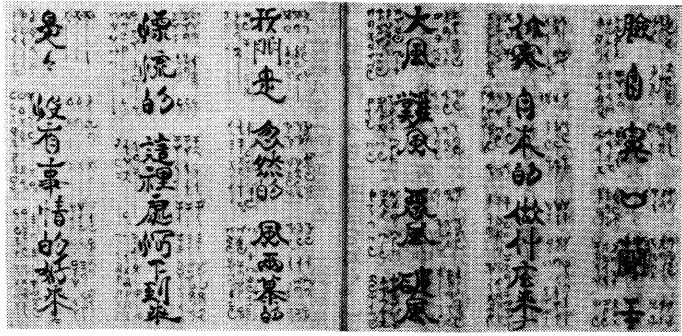
ど検討されないまま今日に至っているようである。

本稿では、その「異様な八分字体を以て直に識別し難きばかりに写された」「異国語発音をあらはす片仮名」(新村氏)のもつ意味を考え、その異国語について検討していく過程で、一冊の唐通事の手になる語学書の、全体像を捕えようとする。併せて、ここでは充分な考察を加えるには至らないが、具体的な言語資料としての可能性も提出することにした。

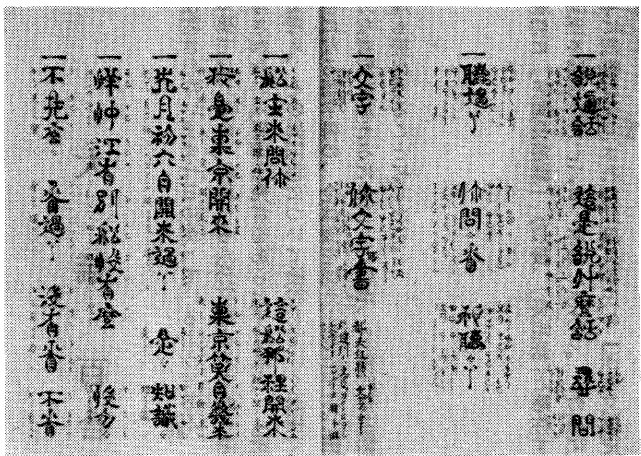
二

最初に「訳詞長短話」(以後、「長短話」と略称することがある。)の閲歴を明らかにしておく必要がある。この項については、大正三年に同書を発見された武藤長平氏の「西南文運史論」に導かれるところが大きい。

「訳詞長短話」には、各冊の終わりに「寛政八年中秋月末八日、魏龍山之を改め写した旨が一々記され、一冊目には更に「都是自祖翁魏喜官東京人傳來之中意 如件」、五冊目には「改記清静写之



(枳型木 一冊 22丁ウ・23丁オ)



(大木 四冊 5丁ウ・6丁オ)

東京通詞 實血(?) 魏五左衛門[㊦]とあるところから、或る程度の見通しがつく。「訳司統譜」によれば、この龍山魏五左衛門とは、天明元年(1781)十月十五日から天保十四年(1843)六月二日まで六十三年間東京通事を勤め上げ、長年の奉公によって褒賞を下された人物である。魏喜、又は喜一はその先祖で、寛文十二年(1722)に、後世明楽で知られた魏(鉅鹿)氏初代九官の僕として東京から付き従ってきたものである。魏喜は名を五平次と改め、元禄十二年(1699)四月二十九日、東京久蔵の後暫く絶えていた東京通事を仰せ付けられ、正徳二年(1712)に亡くなるまでその職にあった。その後五左衛門、五平次と続き、四代目が龍山ということになる。暹羅通事、モウル通事が代々日本人であったのに対して、東京通事の場合は、初代東京久蔵はともかく、東京人及びその子孫が務めを果たしていたことが分る。

「訳詞長短話」編纂の事情は、『長崎志統篇』中の「年表孝要」寛政七年の条に

東京通詞魏五左衛門、暹羅通詞森田治大夫兩人へ通弁之書を編輯し非常之節の為御役所へ可納置旨被命に付各訳詞書を謄写して奉之、仍て筆紙料として五左衛門へ銀一枚、治大夫へ金二百疋賜之とあるのよってほぼ察せられる。官命によって成ったものであり、自ずから公的な性質を帯びている点注意しておく必要がある。更に、武藤氏が「長短話」を発見されたのが長崎県庁の倉庫内であったこと^{注69}、又、改め写す旨の奥書き(前述)や、本書の性質上各通事の家^{注70}に必ず備えられていたはずのものであるのに、通事の家には伝わっていないこと等から、この時「御役所」へ「謄写して奉」ったのが長崎県立図書館蔵本であろうと推定される。

今一つ忘れてならないのは、先にも触れた通り、この書が唐通事養成のための必読書とされていたことである。ちなみに唐通事の中国語学習の順序は次のようだったという。最初に発音を学ぶために「三字経」「大学」「論語」「孟子」「詩経」などを唐音で読む、次いで恭喜、多謝、請坐などの二字話、好得緊、不曉得、吃茶法などの三字話と習い覚え、更に四字以上の長短話を学ぶ、その教科書が「訳詞長短話」である。それから「訳家必備」「養兒子」「三折肱」「医家摘要」「二才子」など、唐通事編集の写本を卒業すると、「今古奇觀」「三國志演義」「水滸傳」「西廂記」等を師に就いて学び、更に進んで「福惠全書」「資治新書」「紅樓夢」「金瓶梅」などを自習し、難解なところを師に質す——以上が普通の順序であった。^{注69}^{注70}岡島冠山の「唐話纂要」「唐語使用」等も入門の必読書であったが、中でも教科書として最も重宝がられたのが「訳詞長短話」と「訳家必備」で、実際の交易の場でのやりとりを想定して書かれているところから、会話用テキストとしてこの二冊を卒業することが何より肝要とされたらしい。

三

前項で「訳詞長短話」の成立事情をたどり、又、同書が唐通事の中国語学習の、言わば初級クラスの会話テキストとして、常用されたことに触れた。しかしながらこの書は、本来的には中国語の語学書として成ったものではなさそうである。第一冊目には本書の構成を次のように記す。

一、小二冊ハ諸攤之讓話ナリ

一、大三冊ハ東京話二冊也一冊ハハルシイ（筆者注「モウルの話」）

海外也 一捨五冊ナリ（傍点筆者）

即ち、ここに挙げられた外国語の発音を例の独特の字体で書き記すのであって、東京通事である編者の意識としては、本文の中国語ではなく、むしろ左右に示された外国語の方が主役だったと思われる。

ところで、雨森芳洲の「橘窓茶話」の一節は、唐通事の中国語教育が、とりわけ唐話の発音の習得に心を砕いたものであったことを教えてくれる。櫻櫛のうちから慣れ親しんだ唐音であつてみれば、「長短話」に期待するのは、基礎的な会話の力と貿易交渉の際に必要な言葉を身につけることで、発音を示す文字が少しばかり変わったものであつても、それ程支障はなかつたものではなからうか。結論から先に言えば、この文字は一字一字は結局ただの片仮名である。各通事家で本書が書写されたにしても、それがそのままの字体で写されていたかどうかは保障の限りではない。

さて、仮名の解説には、第五冊にモウル語をハ唐訳して、普通の片仮名で南京語を付しているのが利用出来る。韻鏡の枠組みで字音表を作り、それを第一冊目の南京語と対照させていく、という手順を踏んだ（仮名字体表参照）。

本文の唐語の八分めいた字体については、東京では中華の文字を用いるけれども、多くは八分子や古文字、或いは絵のように写している、と言っているの（注）で、東京で用いられるという字体に倣つたものであらうと見当がつくが、外国語の発音を写すという機能に於いて仮名を越える点が始まらないならば、何故ことさらこのような文字を使わなければならないのか。直線を嫌い一点一画を曲線的に繋ごうとする、出来る丈閉じた形にする、等の傾向性が見てとれる

〔仮名字体表〕

ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ	ン
pp	q	sh	t	n	h	m	y	r	w	ng
i	ki	shi	chi	ni	hi	mi		ri	ki	
u	ku	su	tsu	nu	fu	mu	yu	ru	ku	
o	ko	so	to	no	ho	mo	yo	ro	ko	
o	ko	so	to	no	ho	mo	yo	ro	ko	
エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ		レ	エ	
イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ		リ	キ	
ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム		ル	ク	
の	の	の	の	の	の	の		の	の	
の	の	の	の	の	の	の		の	の	
の	の	の	の	の	の	の		の	の	
の	の	の	の	の	の	の		の	の	
の	の	の	の	の	の	の		の	の	
の	の	の	の	の	の	の		の	の	
の	の	の	の	の	の	の		の	の	
の	の	の	の	の	の	の		の	の	

から、やみくもに変形したのではあるまい。

考えられるのは、一つは梵字の影響である。「訳詞長短話」には梵字を大要尊重する思想が見られる。一口に言うと、梵字は森羅万象と関わる深遠なもので、日本や中国の言葉も畢竟梵字を根元とする、というような内容であつて、「長短話」第一冊はハ訳詞長短話へ縦横長短話の二部から成るのだが、前者の大半は梵字の解説に費やされている。その梵字の発音を示す片仮名を見ると、入筆やハネ等、運筆が梵字の場合とよく似ており、梵字一字に二字以上の仮名を付す場合には、その複数の字を密着させて一層梵字に近づけるかのようである。

子細に見ると、その仮名の字体は、通常の字体と異国語を示すそれとちようど中間に位置するような具合になっている。これを楷書とすれば、異国語の仮名の方は行書に当たる。実際「フ」「ワ」

「レ」等は、字形だけは梵字（デーヴァナーガリー文字）によく似ている。そう言えば、一続きに発音させたい場合に二字或は三字注例をつけて書くことは、異国語の長短話にも確かに見られて、この点は正に仮名の欠点を補おうとする工夫の一つである。要するに、梵字を言葉の根元とする思想を背景に、片仮名を梵字に準えて変形したと考えられる。

又、「エ」「ケ」「ス」「ヌ」「ユ」等、特に左右対称に採ねることの出来るものには、本文の字体、即ち八分等の影響も見受けられる。

このような文字の変形には、後学に対して自己の言語観（余りにも形而上的ではあっても）を明確にし、**▲言葉**に関わる者としての哲学を示そうとする高い意識が見てとれる。梵字の一字一体に諸々の神仏が宿り、その一点一画が一仏に当たるといふような、梵字を極度に神格化する思想は、恐らく悉曇から出たものと推測するが、直接影響を与えたのは何か、通事の言語観としてどれ程一般的だったのか、又、この文字自体がどの程度通用したのか等、疑問は尽きないが、今は一切省略に従う。

四

ここで一旦各冊の内容を整理しておく、概ね次のようになる。

○総論・概説篇

一冊

訳蛮大謙長短話

梵語を中心とした文字・言語論、及び中国・インド

近隣諸地方の言語・地理の概説。

縦横長短話

中華（南京）・安南・東京・モウル・阿蘭・インデヤ等六ヶ国の長短話。付和訳

*二冊（欠）

○主要異国語篇

▲東京語▼

三冊 単語篇

付和訳

四冊 会話篇

付和訳

▲モウル語▼

五冊 単語・会話篇

付和訳、唐訳

各冊の体裁も一、二冊はほぼ辨型の小冊子（15・2cm×16・5cm）、あとの三冊は大本（30・6cm×22・1cm）と、内容に応じたものになっている。注例

これによって、本書が単なる単語・会話集に留まらない、総合的な語学書の様相を呈していることが理解されると思うが、それが実際どれ程実を結んでいるかとなると、又問題は別なのである。

本書に記された異国語がどのようなものか、それを知る適当なサンプルとして、**▲縦横長短話**がある。**▲縦**▼**▲横**▼とは、それぞれ**▲縦書き**にする**言葉**▼**▲横書き**にする**言葉**▼を意味する。十四丁に互って列挙された異国語は、その仮名を読み解くと、例えば次の如くである。

テン	チヤン	ニー	キウ	……中華(南京)
テン	チヤン	リー	キー	……安南
テン	チヤン	リー	キウ	……東京
天	長	地	久(二八〇)	
ボタ	ダラス	ダゲ	ダラス	……モウル
セイヨコ	コンビリー	ニイラ	コンビリー	……阿蘭
セイヨコ	コンビリー	テイラ	コンビリー	……インデヤ

(異國語を示す順序は本書と同じ。傍線は私に付したもので、以下同様。)

一見して南京、安南、東京の三語、及び阿蘭とインデヤの言葉が、それぞれよく似ており、以後も、三語共類似したり、モウルと阿蘭が似通ったり等、△横▽については様々な組み合わせがあるが、概ね同様の傾向が続く。

東京、安南と言え、そこで話されていたのはヴェトナム語の筈である。ヴェトナム語は、かなりの漢語語彙を有するとは言え、系統的には中国語と異なるとされている。しかるに

トウ	ズー	ツウ	ダウ	リヤウ	メー	キヤ	メ	キイ	クワー										
トウ	ズー	ツウ	ダウ	リヤ	マエ	カー	ム	キイ	クワー										
トウ	ズー	ツイ	タウ	リヤラ	ニー	キヤ	ム	キイ	クワー										
都	事	智	道	了(二八ウ)	你	家	没	氣	掛(二八ウ)										
「スベテ	ノ	コト	ソシ	シテ	ラ	マス」	「コナ	タ	チ	ヲ	キ	ニ	カ	ケ	ラ	レ	ナ	ヨ」	
ニ	テ	ソ	ン	ハ	ー	キ	イ	サイ	ユウ	イ	ゲ	ン	ジ	イ	キ	ン	グ	ウ	メ
マ	エ	チ	ソ	ン	ハ	ー	キ	イ	サイ	ユウ	イ	ケ	ン	シ	イ	キ	ン	ス	ウ
ニ	イ	テ	ソ	ン	ハ	ー	キ	イ	サイ	ウ	イ	ケ	ン	シ	イ	キ	ン	ス	ウ
你	得	送	把	奇	在	有	々	一	件	如	今	我	門						
「コ	ナ	タ	ニ	ワ	タ	シ	ア	ツ	ケ	ラ	イ	タ	ル	ヒ	ト	シ	ナ	タ	ダ

ソ	ン	ソ	ン	リ	ヤ	ウ	ワ	ン	リ	ヤ	ウ	テ	エ	ー	バ	ア	ミ
ソ	ン	ミ	リ	ヤ	ー	リ	ヤ	ワ	ー	リ	ヤ	テ	イ	ー	バ	ア	ミ
ソ	ン	ミ	リ	ヤ	ー	リ	ヤ	ワ	ン	リ	ヤ	チ	イ	ー	バ	ア	ミ
送	々	了	(二九オ)	完	了	的	也	罷	々(三〇ウ)								
ワ	タ	ン	ナ	サ	レ	「シ	マ	イ	テ	モ	ヨ	カ	ロ	ウ	ミ		

のような文の場合も、漢字の一字一字に南京語と同様の対応をしているとは不審である。ただ、中に「四||ポーン」(Soy)等ヴェトナム語かと思われる単語もあって、検討を要するが、恐らくここで言う安南語、東京語は、その地で実際に話されている言葉ではなく、敢えて言うならば、いくらか東京語・安南語的な要素の混じった中国語、というくらいのもではなからうか。当時長崎に入津する唐船中、奥船(暹羅、東京、東埔寨、六昆、咬啞吧から来る商船)もその船主は大概中国人であって、現地からの乗組員はごく少数だったらしい。奥船の来航自体、口船(江蘇浙江から来るもの)・中奥船(福建広東から来るもの)に比して非常に少なかったのだから、交易に必要なのはやはり中国語で、東京通事とは言っても、必ずしも東京の言葉に堪能である必要はなかったと思われる。

一方、△横▽の三語、特に阿蘭とインデヤの言葉には、△疑似サビール語▽的な要素が認められる。前掲の「セイヨ(全)」はポルトガル語(現代語。以下同様。)cer、スペイン語(現代語。以下同様。)cielo。「テイラ(地)」は同じく terra (ポ) 或いは tierra (ス) と思しく、仮名表記としてはさほどの外れなものでもない。その他、ポルトガル語形のみ幾つか挙げてみると

日	ソウル	sol	・	黒	プレイト	prêto
月	ルウワー	lua	・	草	エルパ	erva
山	モンダ	monte	・	木	アルポレ	árvore

海 マアル mar ・国 レイノ reino
 老(老人) アンチヤン ancia ・金 ヲヲロ ouro
 青 ベルテ verde ・まだ △副詞▽ アインター ainda
 白 プランコ branco ・多い ムイト muito

等、見当のついた範囲では、原語の面影を彷彿とさせる程度には正確に写してあり、先行の単語集の類の存在を推測させるが、しかし、それもせいぜい単語のレベルまでであって、

ジ ヘン テ° ビヤウ リエウ テ°
 ニ ボン テ° ビヤウ レウ テ°
 シ ホン テ° ヒヤヲ レウ テ°
 日 本 的 (二三三) 漂 流 的 (二三〇)
 サ ホン テ° デルヤ ホン
 ジャ パン テ° バラン アート テ°
 (ジャ ボン テ° バツソバラー
 アズヤ

等の「―的」に当てられる「テ」は中国語のようであるし、又、否定形を作る場合に

曉 得 了 「ジャウチデゴザル」
 ↓ 「フシャウチナ」
 不 曉 得 々 ナア ミイ ダン

アピリイアル ナンナンアピリー
 アルアピリイ アピリイナンナン
 (波線筆者。) (二四ウ)

回 去 「カエル」
 ↓ 不 回 「カエラス」
 ナア メルイ ナン トルネ
 トルネー ナン トルネ
 メルネー メルネナンナン
 (二七オ)

の如く、「ナン(現代ポ nao, non に当たるか)」を一、二個前か後ろに付する仕方は、当該言語の文法に則ったものかどうか疑わしい。まして

多々 有 「ララクアル」 「アル」
 テン ムイトアル ニースー
 ナン ムイ アル ムイアル
 テン テン アル アール (二六オ)

等を考え合わせると、波線部の「アル」は日本語ではないかと疑われ、そうなることこれらの異国語は、全く寄せ集めのカタコトといった趣きである。疑似サビール語の所以だが、この辺り、ケンプエル(元禄三年(1699)から同五年まで日本に滞在。)の残した通事(詞)に対する悪口を、そのまま裏付けるかのようである。

阿蘭、インデヤの二語が類似するのは、インド中の西・葡・蘭いづれかの植民地を背景にすることと想像される。龍山自身この二語には全く自信が持てなかったらしく、人に疑われたり失笑を買ったりすることを怖れて、^{注例} 厳に他言を諫めている。

モウル語については、一体どの言葉をいうのか、今のところその正体を把み得ない。東京語の例から推して知るべしというところであるが、いづれ後考を俟ちたい。^{注例}

五

以上で、「訳詞長短話」に特有の文字が一つの言語観を反映したものであり、そこに記載された幾つかの異国語がカタコト程度の幼

種な段階のものであることが、ほぼ明らかになったと思われる。語学書としての実用性は、やはり中国語の基礎的な会話力を養成するという辺りを出ないと思うが、《言葉》をその根元から説き起こして総合的に捕えようとする態度が、その可否はともかく、独自のものとして、本書の構成にも認められる。

このような通事自身の手になる語学書を言語資料として扱おうとするのは、

- 1、異なる言語同志がぶつかった時、そこにどのような葛藤が生じたか
- 2、その葛藤を、日本語の中にどのような形で消化しようとしたか

を、異言語同志の接触する最前線で見ようとしてのことである。先に見た梵字の神聖を背景とする言語観も、その葛藤の一つの表われと見ることが出来る。純粹に言葉の問題としては、

- A、音韻・表記の面から
- B、訳語の面から

という二つの方向からその資料性を考えることが出来ると思うが、その場合、通事が常に生の外国語と接触する立場にあったということだけでなく、その接触の場が長崎という一地域に限定されていたことが、一層興味深い問題を提出するように思われるのである。

- A、音韻・表記の面から

さしあたって、五冊目のモウル語の《唐訳》が、唐音資料として利用出来る。南京語と銘打ってはいるが、不審な例もあり、純粹な南京音というわけではなさそうである。注脚詳細は一切後考を俟たねば

ならないが、「水ツユイ、ツウー」「掛クワ、クワイ」等、音声的な変化を一つ々表現しようとしているらしく、固定化に到る前の段階として興味を惹く。末尾に字音表の一部を付した。大勢はそちらに譲ることにした。

なお、補助的な資料として、南京から福建、広東にかけての方音に関する記述が多少あるが、紙幅の関係上ここでは触れない。

- B、訳語の面から

直接貿易に関与したのは長崎の地役人と通事だったのだから、そこでの話が土地の言葉であっても、何ら差し支えなかったわけである。「長短話」の和訳にはまま長崎方言が認められ、方言資料として利用出来るのである。目につくまま幾つか挙げてみると、例えば

髪毛	カミゲ	曉了	キヤシタ、消	ケヤス
耳糰	ミミゴ	縛	クヒル	
大姆指	タカタカユビ	閉	セク	
無名指	ベニサンユビ	完	シマイタ	
姓子	ワロウ	動氣	ハラカク	
蕎	ソマ	掃	ハワク	
人參	ニイジン	《形容詞》		
茸	ナバ	暖々	ヌクイ	
手巾	テノグイ	重々得	ユムタイ	
帽子	ボシ	《副詞》		
魚	イヲ	静々	ヨウラ	ミ
蠅	ハイ	《助詞》		

下雨 アメノフル

做甚音 ヲトノスル

(上が本文の中國語、下が和訳。)

又、「モウヨロシウゴザリマスタイ(寵怪了)」のような、用例としてはかなり古いと思われる終助詞の例もある。

六

「訳詞長短話」は、元來通事の間だけで用いられるべき書だったのであり、實際それ以上に広まることはなかったようである。今日まで余り知られることなくきたわけであるが、機能に於いては仮名と大差ないとは言え、一つの言語観に基づいてこのような独特の文字が使われたという事実は、もっと知られてよいことのように思われる。

「訳詞長短話」に採られた語彙について等、触れ得なかつた問題も幾つかあるが、それらに関しては、又、別の機会をもつことにしたい。

注

- (1) 「釋字書」という語を、本稿では「外國語について記述した書」という程の緩やかな用い方をしている。「月刊言語」12・2(昭58・2)二八頁、井田好治氏の一文等参照。
- (2) 岩波「國書繪目録」によると、京都大学に全五冊の写し(大正期のもの)があるとのことだが、未見。なお、調査に際しては筆者撮影の写真版に拠った。
- (3) 東京通事、モウロ通事、通羅通事をも含めて「唐通事」と總称するのが当時の習いであった。ちなみに「ツウジ」という場合、ハオランダ通詞(ハ唐通事)と書き分けるのが大方の例である。
- (4) 蛇足のようにであるが、誤解を避けるため一応簡単に説明を加えておくと、安南はイ

ンドシナ半島の東海岸地方。そこに隣接するのが、トンキンデルタを中心とした半島北部の東京地方。又、モウルとは、かつてのムガル帝国について。

(5) 本書の存在を知る直接のきっかけとなったのは、この文字についての中田喜勝氏の言及である(「日本に於ける華音の声母のツ・キ」について)。「長崎大学教養部紀要 人文科学」18・昭53)。記して感謝申し上げたい。

(6) 「訳詞長短話」解説」と題する十三行程の簡単な紹介文。大正四年十一月「芸文」初出。「新村出全集」第八卷(筑摩書房)五八八頁。そこには「訳詞長短話」の写真も一葉(四冊、四ウ・五オ)収められているので、参照して頂ければ幸いである。

(7) 管見の限りでは注(5)中田氏が僅かに触れられているので、参照して頂ければ幸いである(「南山俗語考の音韻について」。「中国文学論集」創刊号、昭45・5)。

(8) 大正十五年六月(岡書院)刊。なお、同書にも注(6)と同じ写真が収められている。明治三十年九月刊。類川君平編。「長崎県史一史料編第四」(吉川弘文館)に拠った。

(9) 鄭永寧の「訳詞統譜」跋文には「五右衛門」とある。

(10) 「西南文運史論」四七頁。

(11) 同右四二七頁。

(12) 同右四二九頁。「何礼之翁談による。」とある。注(3)と共に訳家の子孫の直話に拠るらしい。

(13) 石崎又造氏「近世日本支那俗語文学史」(弘文堂書房)昭15・10、一四頁。

(14) 引用は「日本隨筆大成」第二期四に拠る。但し旧字体を新字体に改めた。「通詞家成日」唐音聲習教之当(以二七八歳一為上始、殊不知知。七八歳則然、矣。非レ從二種中一則莫二之能一也。我東有單音而無二合音一。單音何。曰アイウエオ也。碎音也。合音者何。曰アンインウンエンランアウイウウ、エ、オ、アツ、イツツ、エツツ、オツツ也。全音也。我東孩兒之於二單音一也。聯二慣熟三聲於極極不言之中。二歳以上智惠漸開。結而成レ語。其勢然也。今以三不便之合音。連教一唐話於七八歳時。唯見二其聲一耳。然則爲レ之如何。曰二歳以上童蒙引聞之際。漸次教以二合音一。使下之。幼歌舌滑。有レ如二天成一。以二爲二五六歳上學レ話之地。一則庶幾「易耳」。(上巻)

(15) 一冊二二ウ一三オ。但しどういふ事実を指してこう言っているのかは定かでない。

① 五冊目の南京語(普通の字体)ではもっとそれが明らかである。例えば、*キヤイ*、*リリ*等。このような横付け書き \vee はごく普通に見られ、実際の発音を意識した上で一つの書式と看做される。契沖「和字大綱抄」の合字等、併せ考へるべきものと思われる。印刷の都合上、末尾の字音表にはそれが表わし得ない。

② 第二冊は未見だが、本書の中で「小二二」と一括りにされているので、まず内容的にも第一冊と同列と見てよかろう。

③ 墨付きは順に三八八、三五二、三七七、三八八。ほぼ均等で、第二冊も三七七前後と想像される。

④ 「世界言語概説」下巻(平凡社)、「安南語」の項(三根谷徹氏執筆)に拠る。

ポーリー
スー
ワイ
クウ
ビン

四 界 大 平 (一ハウ)

⑤ 「西南文運史論」四五〜四六。山脇悌二郎氏「長崎の唐人貿易」(吉川弘文館)等も参照。

⑥ 「長短話」にもその旨の記述がある。

「(筆者注)南蛮・インデヤの言葉は、根元十冊夫ヲ三冊ニ合議置ナリ。其三冊之自内抜テ撰略シテ是ニ号寫スル者也。」(一冊・三三オ、ウ)

⑦ 少なくとも、現代ポルトガル語では存在を表わすのにこのような表現をとることはなさそうである。

⑧ 「長崎県史史料編第三」の日本語訳で示す。

「外国人との貿易の便利のために、將軍は一団の通詞を置き、年々給料を支給しており、オランダ語、ポルトガル語、トンキン語、シヤム語、三つのシナ語(南京・福州・漳州)、その他数箇国語を通訳させる。この通事は概して無字で、外国語の数箇国語をとりまぜて日本語の例に準じて発音することが出来るだけで、従って彼らと話すには、更にまたもう一つ別の通詞が必要となるくらい、その言葉は理解しにくいものである。」(ケンブエル「日本史」より)

ケンブエルの日本滞在は元禄三年(1699)から同五年まで。これは、来日してはば二十年、未だ東京通事を仰せ付けてはいないが、觀喜宮の代に当たる。

⑨ 「尤我沖モ正鉢之與人ニ応対不仕シテ此言実々愚盲似リ。雖然伝承雖不中言不遠マシ。唯々我口任之趣意述ル己而。萬端ノ絲者之心可有乎必勿他言事。其趣意以敢異話ヲ不有聊情ニハ。正鉢之無人故他言シテ人疑己而。或□一笑スル。実々タリ。」(一冊・三四オ、ウ)

⑩ モウル語のために特に一冊を割いているのは公からの要請でもあったのだろうか。寛政七年に官命を受けた中に、モウル通事ははいっていない(第二節参照)。

⑪ 注(7)中田氏論文に、近世日本でいう「南京音」とは、単に当時の南京省の音だけを指しているのではなく、浙江省及び江蘇地方までも含む相当広い地域の方言を対象としたものであった、との指摘がある。

〔付記〕

資料に関しては、長崎県立図書館史料課の方々にとかなかたならぬお世話になった。心より感謝申し上げる。又、貴重なご意見をお聞かせ下さった諸先輩にも感謝申し上げます。

〔追記〕

第三節で触れた、仮名を二、三字密着させて一続きに発音することを示す方法には、所謂唐話辞書の唐音の付し方も影響しているのかもしれない。特に冠山系の語字書が注意される。

○通振

東韻(一・二等)	見 公コソ・エヨソ	溪 孔コソ・空コソ	端 東トソ	透 通トソ・楠トソ	定 銅ゼソ・重トソ	來 同ドソ・動ドソ	來 籠ロソ	精 純ソソ	心 送ソソ	屏 韻(一・二等)	定 読ド	東 韻(三・四等)	敷 風フソソ	群 窮キヨソ	知 中チヨソ	照 衆チヨソ	原 韻(三・四等)
----------	-----------	-----------	-------	-----------	-----------	-----------	-------	-------	-------	-----------	------	-----------	--------	--------	--------	--------	-----------

○江振

非 廣ボ・福ホイ	明 目モ・木モ	來 六ル	冬 韻	端 冬トソ	鏡 韻	並 茂(ソソ)	奉 奉ホイ	曉 用ヨソ	見 恭コソ	澄 重トソ	從 從ソソ	照 難シヤソ	端 韻	曉 浴ヨ	溪 曲キヨ	疑 瓊タウ	照 獨チヨ
----------	---------	------	-----	-------	-----	---------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-----	------	-------	-------	-------

○止振

江 韻	見 講キヤソ	梵 韻	匣 学ヒヨ	見 角コ	支 韻(開合)(三等)	並 絳リウ	曉 戲ヒ	群 奇キイ	知 知ツウ・智ツウ	來 離リイ	日 兒ルウ	照 紙ジ・只ツエ	禪 是ス	支 韻(合)(三等)	曉 為ヲエ	疑 危アラ	來 羸ニイ・累ルイ
-----	--------	-----	-------	------	-------------	-------	------	-------	-----------	-------	-------	----------	------	------------	-------	-------	-----------

禪 睡シユイ	脂 韻(開)(三等)	明 眉ムエー・美(ムイ)	溪 器キイ	娘 妮ニイ	來 利リイ・麗リウ	日 二リヤソ	照 指チピ	審 師シイ	脂 韻(開)(四等)	並 鼻ヒ	定 地リイ	心 四ス	脂 韻(合)(三等)	曉 位ヲエ	審 水ツユイ・フウ	脂 韻(合)(四等)	曉 遺イ	精 噴ツイ
--------	------------	--------------	-------	-------	-----------	--------	-------	-------	------------	------	-------	------	------------	-------	-----------	------------	------	-------

之 韻	影 意イ	曉 喜ヒイ	曉 興ヲエ	見 記キイ	溪 起キイ	群 其キイ	澄 持ナア	娘 你ニイ	來 理リイ・裡リイ	日 里リイ	精 耳ルウ	子 仔ツウ・茲ツウ	從 字ス	照 之リウ・芝シイ	穿 齒キイ	牀 事ス	禪 時ス
-----	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-----------	-------	-------	-----------	------	-----------	-------	------	------

○遇振

微 韻	影 衣イ	曉 希ヒ	見 貴クイ・機キイ	見 婦キク・既キイ	溪 氣キイ	穿 推ツイ	魚 韻	見 居チヒ	溪 去キヒ	娘 女ニイ	日 如ジイ	穿 處チヒ	審 書シイ	禪 昂ジユウ	牀 罔コ・計クウ	見 故クウ
-----	------	------	-----------	-----------	-------	-------	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	----------	-------

○蟹振

溪 庫クウ	疑 五ウ	端 都トウ	定 度トウ・凶ド	來 路ロ・墟ル	精 傲ツラ	審 數ス	群 韻	滂 釜コヲ	並 附フウ	非 夫フウ・府フウ	曉 雨イ	清 取シウ	照 主チエ	哈 韻	禪 拜バイ	並 倍ホイ	影 愛(アエ)
-------	------	-------	----------	---------	-------	------	-----	-------	-------	-----------	------	-------	-------	-----	-------	-------	---------

曉 海ハイ	溪 開カイ	定 台タイ	泥 耐ナエ	來 來ライ	從 在サイ	群 韻	禪 拜ハイ	匣 械キヤイ	見 界カエ	皆 韻(合)	匣 塊ワイ	見 怪クワイ	祭 韻(開)(三等)	審 世ス	禪 新ソエ	齊 韻(開)	滂 批ヒ
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-----	-------	--------	-------	--------	-------	--------	------------	------	-------	--------	------

明	米ミイ
端	底テ・抵チイ
透	替チー・體チイ
定	弟チー
心	洗シイ・細スー
夫	蘭(合)
煙	話ハア
兼	帶タイ
定	大ダア
兼	蘭(合)
兼	外ワイ
灰	蘭
晚	灰ボイ
厚	回ボエイ
漢	塊クワイ
透	退トイ
佳	蘭(蘭)
明	買アイ・メエ

見	解キヤイ
佳	蘭(合)
明	亮マイ・メエ
厚	潤クワイ
見	掛クワイ・クワイ
定	兌ドイ
鹿	蘭(合)
影	藏ライ
○珠	撰
真	蘭(蘭)(三等)
並	貧ピン
疑	銀イン
澄	陳ジン
日	人ジン
審	身シン
審	筆ビ
照	補キイ
真	蘭(蘭)(四等)

影	烟エン
見	緊キン
精	進ツイン
清	親シン
質	蘭(蘭)
精	必ビイ
影	一イ
日	日ジ
麻	夾ジ
魂	蘭
精	本ヘン
明	門メン
清	村リー
沒	蘭(合)
明	沒メ
穿	吞ツイン
術	蘭
群	屈クワ

穿	出チヒ
欣	蘭
群	近キン
迄	蘭
見	吃チイ
文	蘭
非	分フワン・墳ウエン
非	吩フン
文	分フワン・問フエン
喉	雲イン
見	冢クワン
物	蘭
奉	仏フク
散	物ウフベ
○山	撰
山	蘭(蘭)
厚	閑ヘン・ヘン
見	問クワン
疑	眼エン

陪	蘭(蘭)
晚	略ヒヤ
月	蘭(蘭)
晚	歌ヒエ
元	蘭(合)
兼	煩ワン・飯パアン
曉	違ヲン
疑	原フベン・ベン
月	蘭(合)
非	髮パ
疑	月ユウベ
仙	蘭(蘭)(四等)
明	面メン
從	賤ツエン
從	錢ゼン・ゼン
薛	蘭(合)(四等)
心	雪シエ
仙	蘭(蘭)(三等)
明	免メン

兼	運チエ
日	然ゼエン
詳	蘭(蘭)(三等)
並	別ス
日	熱シユヤ
麻	舌スエ
仙	蘭(合)(三等)
群	得ク
穿	穿ツエン
麻	船シウヘン
寒	蘭
影	安アン
曉	罕ハン
明	寒ハワン・ハン
見	幹カン
漢	石カン
透	坦タン・炭タン
定	但タン
心	傘サン

昌	蘭
見	割カウ
點	蘭(蘭)
穿	察サイ
蘭	蘭(合)
明	靈マン・マン
慢	曼マン
垣	蘭
精	半フワン
並	盤パアン
明	講マン
影	胸ワン・胸フワン
附	換チー・軟フワン
見	丸ツツシ・完ハン
見	慣クワン
端	短トハン・端タン
定	斷ドワン
末	蘭

明	抹マ
定	奪テ
先	蘭(蘭)
滂	片ペン
影	煙エン
見	見ケン
疑	硯ケンフ
端	殿シヤン
透	天テン
泥	年子ン
從	前セン
心	先ツエン
屑	蘭(蘭)
透	鉄チ
清	切ツヒイ
屑	蘭(合)
疑	血ケツ
明	穴ケツ
○效	撰

群	札キヤウ・旧ギウ
知	屋ユイ
来	留リウ
穿	臭ジウ
審	手シユウ・首シユ
幽	
喻	油ユウ
清	秋シウ
○ 深 振	
役	韻(三等)
影	音イン
見	金キン・今キン
来	淋リン
照	枕チン
禪	甚シヤイ
糾	韻(三等)
見	給ヘン
来	立リ
禪	什シ・拾シ

便	韻(四等)
心	心シン
邪	尋ジン
群	韻(四等)
從	集シ
○ 成 振	
取	韻
影	暗アア
見	感カン
泥	南ナン・男ユイ
成	韻
来	驗レン
寢	韻
照	占テン
添	韻
端	点テン・店テン
泥	公子ン
帖	韻
見	缺ツェン

談	韻
定	淡タン・談タン
心	三サン
齒	韻
来	纏ラツ
乏	韻
非	法バ
○ 曾 振	
羣	韻(四等)
溪	肯ケン
端	等テン・燈テン
從	曾ツェン
律	韻
曉	黑ウペ
見	匡クワイ
端	得テ
審	色スエ
蒸	韻

穿	穿チン
職	韻
澄	直チン
来	カリ
審	韻チ

※ (は、一ましまりであること
とを示すために私に付した。)